

●モノグラフ小学生ナウ



友だち

vol.3-10



©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智揮
東京学芸大学助教授 深谷和子
茨城県守谷町立大井沢小学校講師 塚本恵美子

目次

特集／友だち	2
調査レポート／友だち	
要約	8
1 日常の友だちつきあい	10
● 子どもたちの放課後	10
● 誰と遊んでいるか	13
2 仲よしの友だちとのつきあい方	16
● 仲よしの友だちの数	16
● いつ仲よしになったか	18
● 仲よしと何をしているか	20
● 仲よしとのつきあいの深さ	21
3 仲よしを求めて	24
● 子どもの人間関係	24
● どんな子と友だちになりたいか	26
まとめに代えて	28
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(20) 母親	30
資料1 調査票見本	36
資料2 学年・性別集計表	42

特集

友だち

東京学芸大学助教授 深谷和子



ある思い出

ポツンポツンと友だちの訃報を聞くようになった。働き盛りの40代だから、まだまだ件数は少ないほうなのだろうが、それでも、交通事故をはじめとして、ガンもあれば自殺もある。竹馬の友に死なれると、妙に自分の歩んできた道を思い起こすこととなり、人間の一生などというものは、どんなに気ばってみ

ても、案外ちっぽけでつまらないものなのかもしれないと思ってみたりする。

そうした友人の訃報に接して、通夜や葬儀の席に集まった仲間たちと故人の思い出を話していると思うことは、友人というものは、たいていの場合、何らかの意味で自分に強烈なパンチを加える存在なのだという認識である。

たとえば、先日死んだ友人は、大会社の社長の次男坊だったが、彼は私が中学1年の時のクラスメートで、私に世の中には大きな貧

富の差があることを教えてくれた人である。当時は終戦後まだそれほどの歳月がたっていない時期だったので、日本中だれもが一様に貧乏だった時代であった。私の通っていたのは、高等師範の付属で、今は筑波大の付属というモーレッツな進学校だが、当時はいい家のお坊ちゃんお嬢さんたちがのんびり通っていた、浮世とは別天地だった。私のような貧乏サラリーマンの娘はその中では異質だったはずなのだが、いい時代で、貧富の差をほとんど意識せずに暮らしていられたのである。とにかくみんなが、表面的には一様に貧乏だったのである。

ある時、昼食にサンドイッチをもってくるのが流行した。今だったらサンドイッチといえば、肉や卵や野菜をはさむのはあたり前のことだが、当時はマヨネーズひとつだって手に入れるのは大変だった。だから肉をはさんだサンドイッチなどは、料理の本のグラビアでお目にかかってあこがれているだけだった。だから私のサンドイッチは、マーケットで買ってきた赤いイチゴジャム（といっても、今思い出してみると、イチゴの粒なんか一粒も入っていなかったのだから、赤い色のついた糊みたいなものだったのかもしれない）をぬりつけただけのものだった。それでもパンは無理して薄く切って、ミミもとって、それなりにカッコよく作って持っていったのである。

ある昼食時に、うしろの席にいた彼が、私に言ったのだ。「オイ、お前のをよこせよ。取り換えようぜ」2、3切れが交換された。彼は私の分を手にとって見て、さも軽べつしたようにこう言ったのだ。「なーんだ、ジャムじゃないか」それを彼は一口も食べずに、ボンとごみ箱へ放り投げたのだ。

私に渡されたサンドイッチを見ると、不思議な肉のようなものが入っていた。これも今思えば、コーンビーフか、ローストビーフか……。とにかくハムやソーセージでなかったことはたしかだった。

世の中にはこんなサンドイッチを食べている人たちもいたのか。食物のない時代の中1の女の子には、それは強烈なショック体験だった。

友だちに与えられたもの

考えてみると友だちというものは、実に残酷なことを言ったりしたりするものだ。親や教師が、子どもに知らせたくない人生の真実から必死になって子どもを遠ざけようとしているのに、その努力を友だちは一瞬にして灰にしてしまう。しかしそのショックから、不思議にも私たちは、日ならずして立ち直る。このサンドイッチのエピソードだって、私は30年以上もずっと忘れていて、やっと彼の通夜の席で思い出したのだった。もっとも、彼自身だってまったく忘れてしまっていたらろ



う。友だちというものは、このように、私たちにちょっと残酷な、しかしほどほどに暖かさを残したやり方で、つぎつぎと人生の正体に目を開かせてくれる。たいていの出来事は、その場その場でお互いに忘れ去ってしまうが、われわれは、こうした体験の積み重ねによって、しだいに人生を知るようになり、自己を成長させてきたに違いないのだ。そうした意味で、友だちとは、きわめて大切な成長への援助者なのだとと言えるだろう。

友だちを求める心

つい数日前に、ある高校生の母親から、こんな電話があった。高1の娘が、友だちの間でイジメにあっているという。なんでも、「他人に言わない」と約束したことを、ついうっかりとしゃべってしまったのだそう。よくある話である。その日からグループの仲間が彼女を徹底的に無視し、グループからはずし

てしまったという。彼女は食事ものを通らず、下痢し、体重も3キロ近く減ってしまった。学校へ行かないというのを、母親がなだめすかしているのだが、このままでは登校拒否になってしまう。担任に話したが、「もとはといえば、あなたが悪いのだから、あなたが解決しなさい」と、とりあってもらえないのだそうである。

こうしたイジメの話は、最近よく聞く。はたで聞くと、そんな友人だったら、こちらのほうで相手にせず、グループからぬければいいじゃないか、と思うのだが、本人のほうではそうした気持ちにはなれないものらしい。つまり、人間にとって、友人とはかくも大切なものということなのだろう。たとえ悪い友人でも、友人を一度に失ってしまうことは耐え難い出来事なのだろう。

このように、人間には友を求める気持ちがあり、そのおかげで、友人のもつ毒をひとつの成長要素に変えて、成長をとげていくもの





なのだろう。

ステップをふんで

しかし、こうした友を求める感情やそれをもとにした人間関係の形成能力は、人間に生まれつき備わっているものではなくて、成長のプロセスで体験される人間関係の中で、少しずつ育てられていくものと考えたほうがよいだろう。

そのためには、次のような人間関係体験のステップを、つぎつぎと、一段ごとに十分に踏んでいくことが、子どもがおとなになる道筋で、どうしても必要になるのである。

- ①乳幼児期における母親への基本的信頼関係の形成
- ②もの心ついた時に近隣の遊び仲間にかこまれて遊んでいた体験
- ③ギャング集団のメンバーとして行う、親からの自立の学習
- ④青年期に入って特定の友人との個人的な親密さの体験

しかし現代はこの4つのステップのそれぞ

れに、各種の阻害要因が働き易くなっている。まず乳幼児期には、働く母親の増加によって、ともすれば十分な母子関係の形成が阻まれ易くなっている。

次の、「ピア・グループ」と名づけられる地域での子どもの遊び集団は、近年影をひそめている所が多い。悪いことに、テレビという、この上なくおもしろく安全な仲間が、子どもの世界に入り込んできて、人間の仲間より先に、子どもと接触してしまう。友だちへの関心や好意を学ばず、友だちとの接触の仕方、人間関係の作り方を体験しないままに、ギャング・エイジを迎えてしまう。

しかしピア・グループでの仲間体験を少ししかもたない子どもたちに、ギャングと名づけられるような結束の堅い仲間集団が、形成されるはずはない。それに、現代は勉強や塾やけいこごとで、子どもたちはお互いに共有できる時間を少ししかもてない。また、徒党を組んで悪いいたずらをして歩くだけの自然や空間もない。ギャングは、青年心理の教科書にのっているだけで、現在はあまり実態のないものになってしまっている。



子どもたちがギャング・エイジを体験しなくなると、当然親からの心理的離乳は遅れ、仲間への信頼感に基づいた社会性の形成は遅れる。現代の青年たちに、自立の遅れが見いだされるのは、このような事情による部分もありそうだ。

これらが重なると、青年期に入っても、エリクソンの言う個人的な親密さの関係を体験することがむずかしくなる。現代の青年たちが優しさを志向し、人のぬくもりを求めながら充たされず、ともすると孤独で不安なメカニズムの中にある傾向は、このようにそれ以前の長い歳月の過ごし方に起因することなのかもしれない。

学校の意味

考えてみると、学校という狭い場所に子どもを集めて教育するのは、昔は知識を子どもに能率よく伝達する唯一の手段だった。しかし、マスメディアの発達した現代では、知識を習得するためだけなら、それぞれの家庭にあって、テレビやラジオやその他の活字メデ

ィアを利用したほうが、ずっと能率がよい。それでも、今日なお、子どもたちを学校に集めて教育するのは、そこで多くの友人や先生に出会い、人と人との関係の中で、一人では学びえないものを学び、仲間によって成長体験を与えられる、そのことのためであると思われる。そうした意味で、今日の学校が、その最大の教育効果を挙げるように機能しているかどうか、こうした観点から考えてみる必要があるだろう。

調査レポート／友だち

東京学芸大学助教授 深谷和子

茨城県守谷町立大井沢小学校講師 塚本恵美子

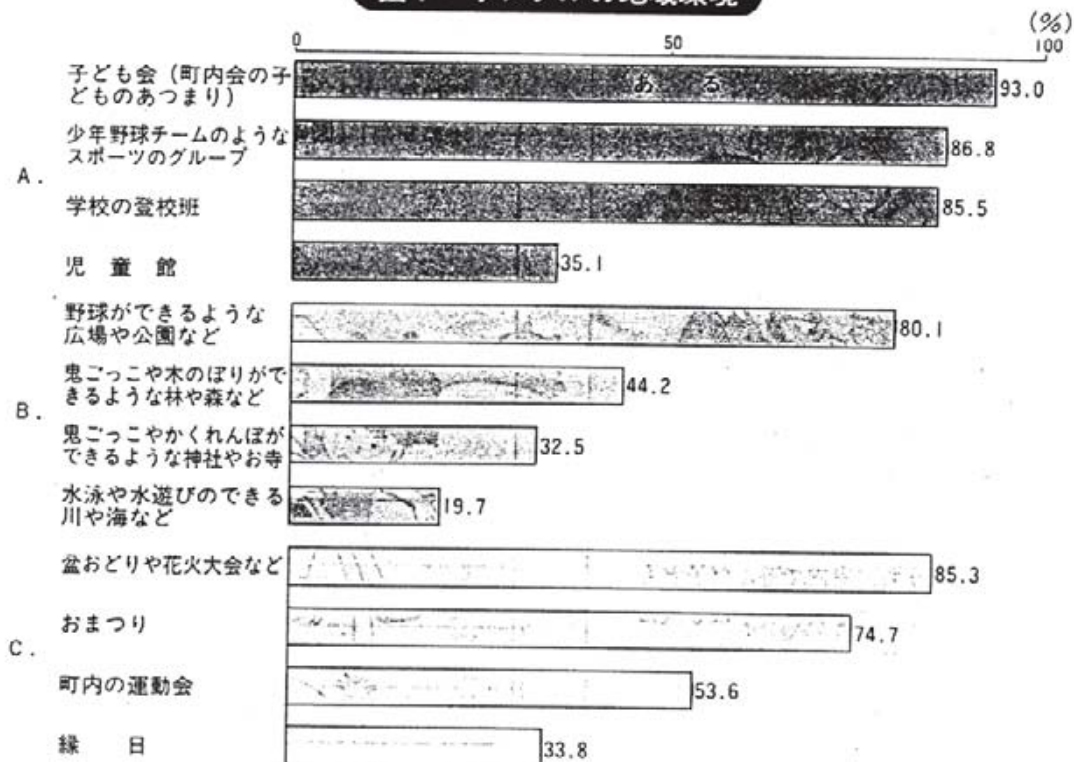
現代の子どもたちは、塾やおけいこごと、勉強やテレビ視聴に追われて、たいへんいそがしく暮らしていると言われる。しかし、子どもにとって友だちが大切な存在であることは、いつの時代も変わらないだろうし、そのつきあいのために、少なからぬ時間をさいていることも確かだろう。しかし、他方でわれわれは、子どもたちの仲間関係、つまり友だち同士の結びつきが、昔に比べて希薄になってきているのではないか、という懸念ももっている。子どもに始まって職場に入ってくる若者に至るまで、最近の若い人びとがなにか人間関係の作り方を知らないで成長してきているかのような印象を、何かの折りに感じることがある。もしかしたら、それは幼児期か

らはじまる仲間体験の不足からくるものかもしれない。

こうした観点から、子どもたちの友だちづきあいについて、接近しようとしてみたのがこのレポートである。

調査地域は、東京と横須賀、茨城の比較的古い住宅地。都市環境としては、まあまあ、子どもたちの遊び場にも恵まれた地域といえるだろう。図1は「あなたの町や学校や家の近くにあるもの」をたずねた結果だが、自然環境には当然のことながら恵まれているとはいえないが、子ども会をはじめとする地域の組織や催し物にはけっこう恵まれているようである。

図1・サンプルの地域環境



要約

① 誰とも遊ばなかった子ども

調査の行われた58年6月のとある
天気の良い日、学校から帰って友だ
ち遊びをまったくしなかった子ども
は、約半分(ただし平日)であった。
その日遊ばなかった子どもは、学年
とともに増えている(図2)。



② 遊んだ場所



その日の放課後、友だちと遊んだ
子どものうち、室内で遊んだ子ども
は女子で2人に1人、男子は3人に
1人であった。室内遊びは学年とと
もに減っていく(図3)。

③ いつも遊ぶ場所

子どもがいつも遊ぶ場所は、歩い
て10分以内にある(男子の8割、女
子の9割)(図4)。



④ 一番仲よしの友だち



子どものもっている人間関係の中で、一番心理的距離が近いのは「母親」、ついで「一番仲よしの友だち」「父親」「きょうだい」「先生」「クラスの友だち」という順である(図20)。

⑤ 先生との遠い距離

先生に対して「なるべく心の中を見せないような浅いつきあい」をしていると答えている子どもは、6年生男子で43%、女子で34%もいる(図20)。



⑥ 仲よしになりたい子

仲よしになりたい子の特性は、「楽しい子、勇気のある子、つきあいのいい子、親切な子」(男子)「親切な子、楽しい子、勇気のある子、つきあいのいい子」(女子)で、「軽さ」と「力」と「優しさ」が友人に対して求められている(図21)。



サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	162	135	297
5年	119	105	224
6年	139	113	252
計	420	353	773

調査概要

対象●東京・神奈川・茨城の
小学校4・5・6年生 773名
時期●昭和58年6月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 日常の友だちづきあい



子どもたちの放課後

まず子どもたちが、ふだん友だちと、どんな接触のしかたをしているかを見てみよう。

図2は、この調査の行われた日の前日(ほぼ晴れ)、子どもたちが、放課後、何人の友人と遊んだかを見たものだ。対象日が平日に当たった子どものうち、誰とも遊ばなかった子はほぼ半分。1～2人と遊んだ子が3割、5人以上のグループで遊んだ子も1割強はいるものの、やはり平日の子どもたちの友だち遊びは、昔より大きく減ってきているようすがわかる。

図の下は学年別のデータだが、男子のほうが女子より友だちと接触しており、また「誰とも遊ばなかった」子が、4年から学年を追ってしだいに増えていくようすがわかる。

次に図3は、その日、どこで子どもたちが

友だちと遊んだか、である。

女子では半分以上が、男子も4割近くは「家の中」で遊んでおり、そのほか「家のまわり」をあわせると、6～7割は、遠出をしていない。これが現代の遊びの姿であることに、改めて感じ入ってしまう。また校庭開放も、行われているわりには、利用者が少ない。公園などの遊び場は、図1に掲げたように、ないわけではないのだが、そこへ行ってまで友だちと遊ぼうという気持ちやヒマがないのかもしれない。

しかし図の下部に掲げたように、室内遊びは学年を追うに従って減っていき、公園などへ出かける子が増えていく。上学年になると、遊ぶ回数は減るが、そのかわり遊ぶ時は行動半径も使う場所も大きくなっていくことがわ

かる。

次に図4は、帰宅後友人と遊ぶ時に、遊びに行く場所までの距離である。図3で見た「昨日のようす」よりも、「家の中」と答えている子が少ないが、家の外では、半分以上が「家から歩いて5分以内」という至近距離でいつも遊ぶ、と答えている。歩いて10分以上遠くに

出かける子は、男子で2割、女子で1割しかない。今の子どもたちが「遠い」と考える距離は、これまでの調査データでは、ほぼ「10分もしくは15分」以上、であるようだが、昔とくらべると、子どもたちの「世界」、すなわち心理的空間が、ぐんとちいさくなってきているようすがわかる。

図2・きのう、家に帰って何人と遊んだか

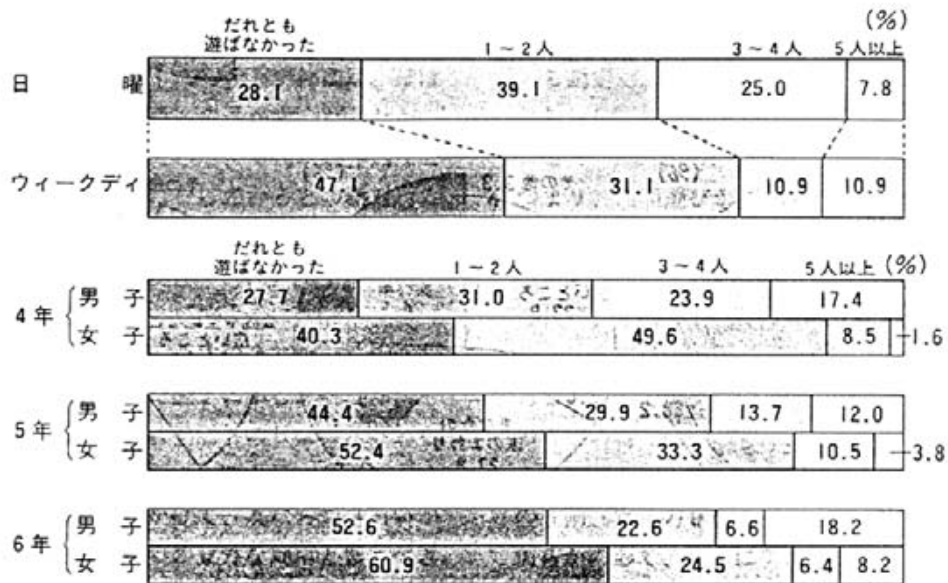


図3・きのう遊んだ場所

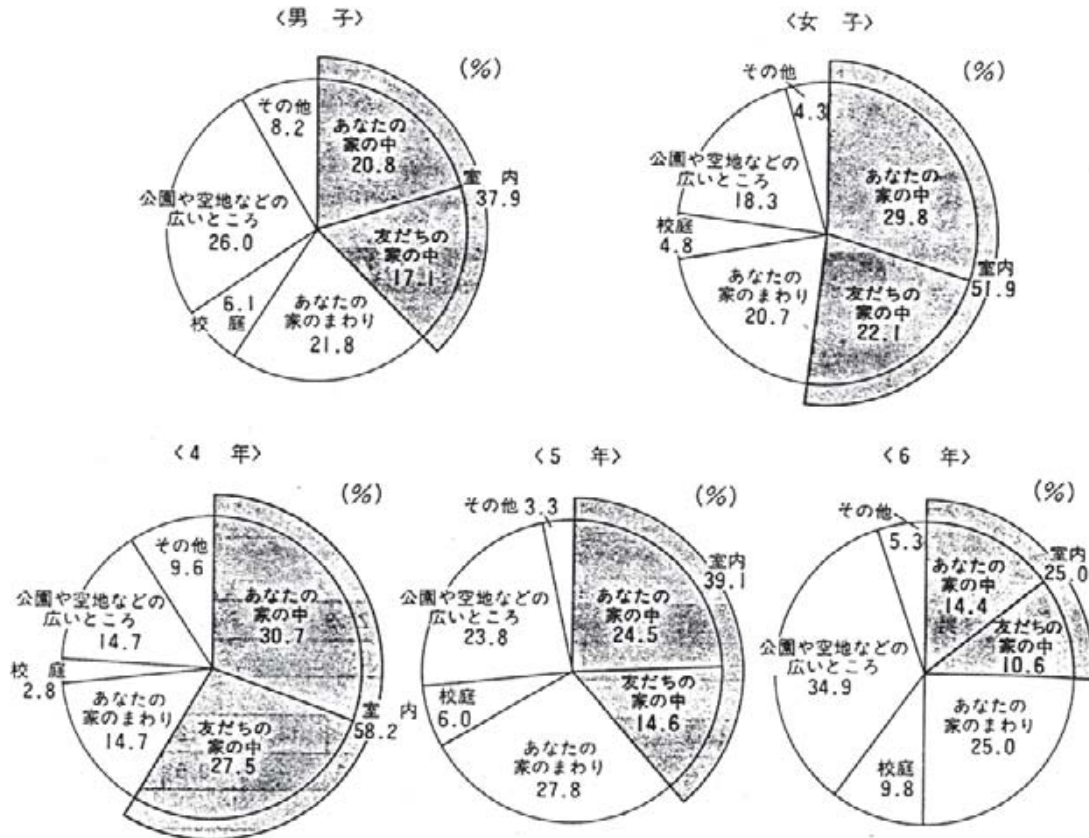
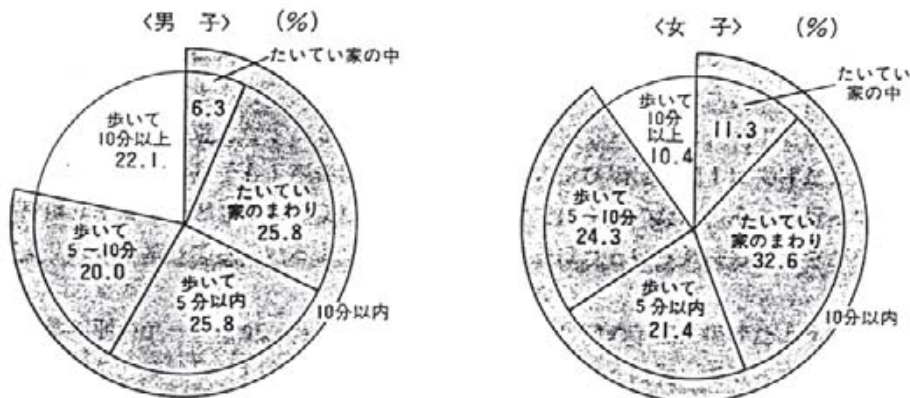


図4・いつも遊ぶ場所までの距離



誰と遊んでいるか

次に図5は、学校から帰った後に遊ぶ友だちの種類である。よく遊ぶ子は同学年の子が圧倒的で、平均4人ぐらい放課後の遊び仲間をもっている。しかし年上や年下の子と全く遊ばないわけではなくて、しょっちゅうではないにせよ、5割は年上の子とも6割は年下の子とも遊んでいる。

さて、昔の子どもたちの遊び仲間は、ほぼ地域の子か同じクラスの子が中心だったが、今は塾で友だちができて、それが塾へ通うことの一つの楽しみになっているとの話も聞く。

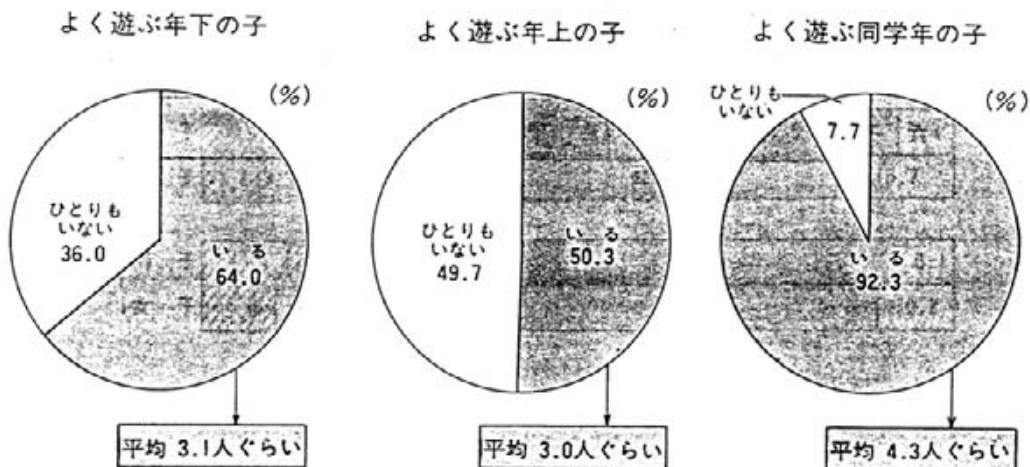
図6はこの点を見たもので、塾やおけいこへ行っている子（全体の80%）の中で、塾やおけいこで知り合って仲よしになった子の割合を示したものだ。全体の7割が、塾友だちをもっている。また図7に示したように、それらの塾友だちとは塾以外の日はつきあわない子もいるが、男子の6割女子の5割は、けっこうそれがきっかけで、友だちつきあいが深められている。塾の意外な効用と言うべき

だろう。

さて図8は、友だちと放課後遊ぶ回数だ。全体として1割の子は、放課後も毎日のように友だちと遊ぶと答えている。むろん上学年になると、その割合は減っていく。これと「週の半分くらい」を合わせると、3割強は、家へ帰ってもわりとひんぱんに友だちと遊んでいる勘定だ。

しかし、ほとんど遊ばない子も同じくらいいる（「今まで一度もない」と合わせて3割強）。つまり、仲間遊びが全く失われたわけではないが、全体としては、昔にくらべて子どもたちの放課後の行動が、さきのデータとも合わせれば、量的に貧弱になったことは明白だ。そうした側面を表す一つのデータが、図9である。かつては、特別な場合をのぞいて、その場その場で始まるのが遊びの世界のふつうの姿だったが、現在は図が示すように、男子の8割、女子の9割と圧倒的な子どもたちが、何らかの形で、事前にアポイントメントをと

図5・学校から帰ってからよく遊ぶ友だち



っている。そういえば、昔のように「〇〇ちゃん、遊びましょ」というよび声が消えて久しいのはむろんだが、最近ではトントンとドアをノックして、出てきた友だちに、「〇〇ちゃん、今日遊べる？」という言い回しで、遊

びにきそっている姿が一般的になった。「遊ぼう」から「遊べる？」へ、子どもの生活がしだいに能動性や主体性を失ってきていることが、この言い回しに表れていると言ってよいだろう。

図6・塾で知りあった友だち

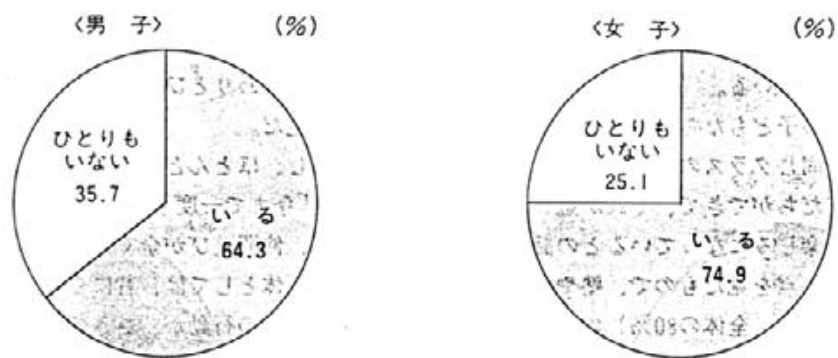


図7・塾で知りあった友だちとのつきあい

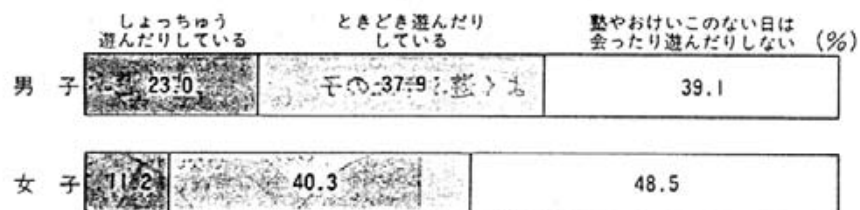


図8・友だちと遊ぶ頻度

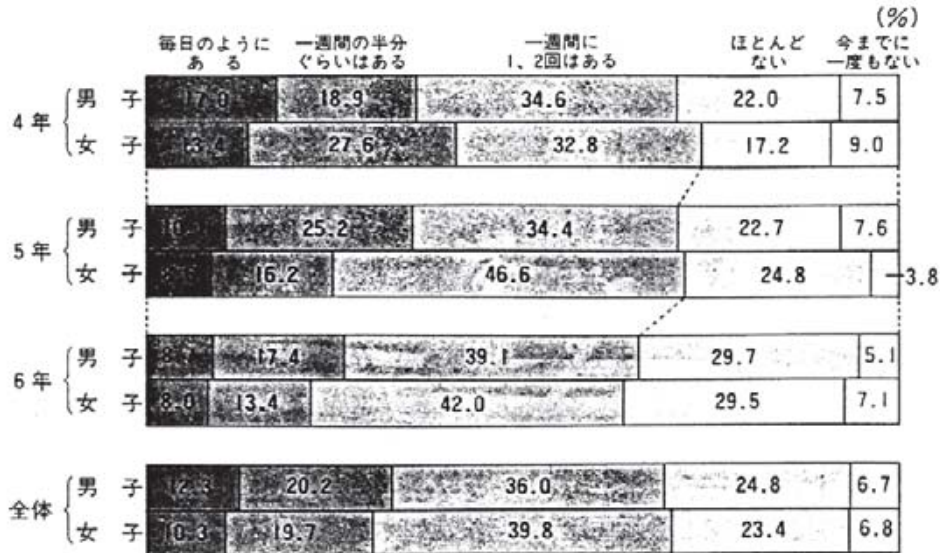
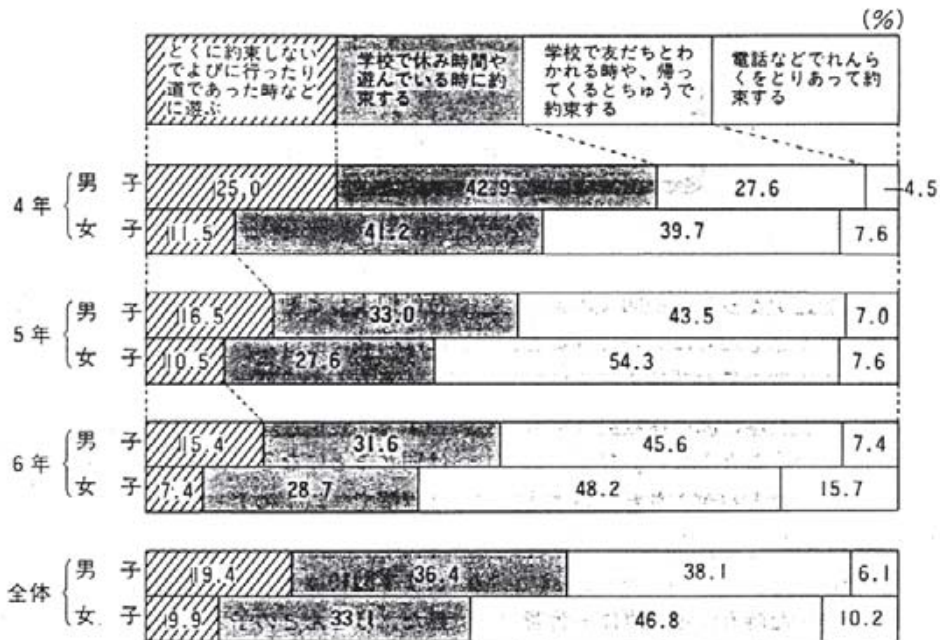


図9・遊びの約束



2. 仲よしの友だちとのつきあい方



仲よしの友だちの数

親友というコトバが昔はあった。しかし今はどういふわけか、子どもたちの間であまり使われていない。子どもたちに聞いてみると、友だちの中で、よく遊ぶ子が「仲よし」で、「親友」というコトバは、聞けばわかるがあまり使わない、ということらしい。ひょっとして「親友」というコトバがふさわしいような友だちとの深い結びつきがなくなってしまったのだろうか。

この調査票を作った時も、その点に一番苦心した。昔だったら「親友」と名づけられたような、特別の信頼関係の成立している友だち関係を探りたくて、ワーデングを工夫した。したがって巻末の調査票に示したように、「仲よし」と「特に仲よしの友だち」とを使い分

けたつもりだった。しかし、結果はどうやら、特に仲よしと断っても、それは「仲よし」とほぼ同義に受けとられたようである。なにしろ「親友」の実態がなければ、いくらコトバの上で「特に仲よし」と断ってみても、結果は同じことになるのは当然だ。さて、そういう理解で、以下のデータを見ていくことにしよう。

まず図10は、「(特に)仲よしの友だち」の有無だ。ほとんどの子どもが仲よしを持っていると答えている。図11はその人数だ。1人か2人くらい、と答えた子は非常に少ない。7人以上と答えた子が、4年生の場合だと男子58%、女子46%。5年生で、67%と51%。6年生で、73%と50%。半分以上の子どもが7

人以上と答えており、その数は、思ったより多い。また、女子は学年を追ってもそれほど変わらないが、男子は一年ごとに、大きくふ

えていく。社会性の発達の性差が見られる感じである。

図10・特に仲よしの友だち

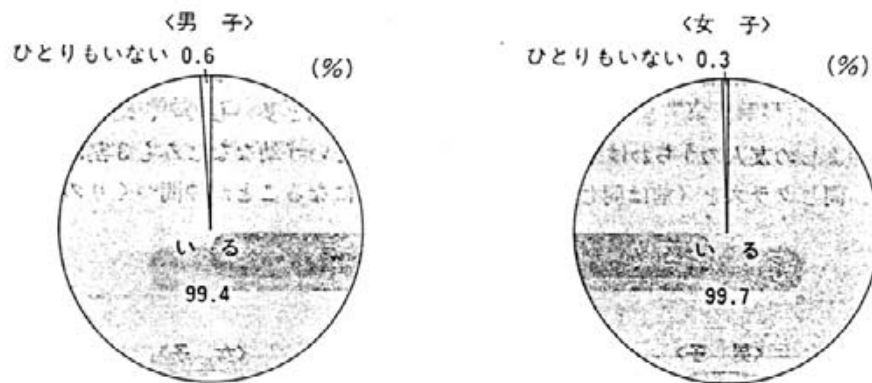


図11・特に仲よしの友だちの人数

学年	性別	人数 (%)				
		1~2人	3~4人	5~6人	7~10人	11人以上
4年	男子	7.0	17.4	17.4	23.3	34.8
	女子	8.6	25.6	20.2	25.7	19.9
5年	男子	3.6	10.6	18.5	20.1	47.2
	女子	3.8	19.3	26.0	27.0	23.9
6年	男子	0.3	10.3	5.9	22.9	50.6
	女子	4.6	23.9	21.1	17.4	33.0

いつ仲よしになったか

現代の子どもたちの友だち関係は淡いものだという声を聞く。ドライで利己的な関係だと言う人もいるし、同じクラスにいる間だけが友だちで、クラスが変わるととたんに仲よしでなくなる、という指摘もされる。本当だろうか。

図12は、仲よしの友人のうちわけを聞いたものである。同じクラスと（前は同じでも今

は）違うクラスの友人、またはその他（年齢が違う子など）に分ければ、三者がほぼ等しい割合だ。また図13に掲げたように、一番の仲よしについていつごろから友人になったかを聞いてみても、むしろ「同じクラスになって」が6割と多いものの、幼稚園やそれ以前から、という幼なじみも3割はいる。同じクラスになることが仲間づくりの主なきっかけ

図12・(特に)仲よしの友だちとは

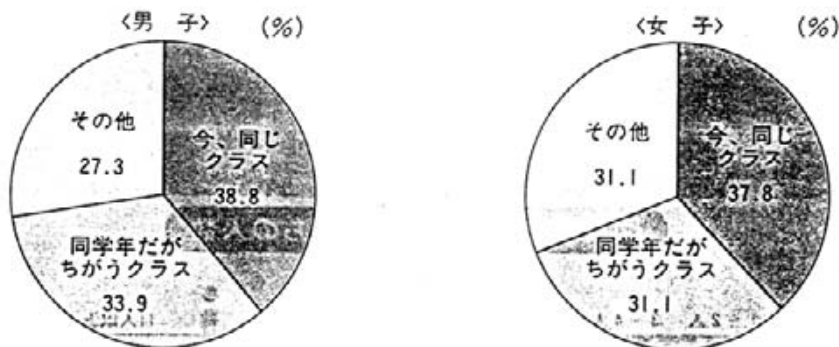
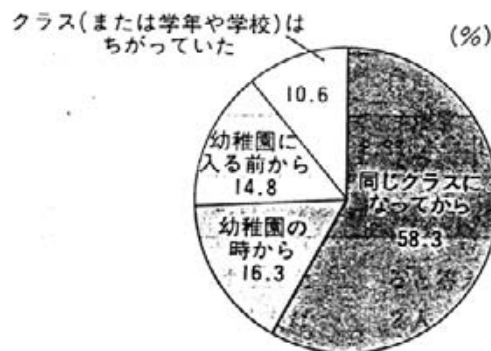


図13・特に仲よしになったのは



けにはなるものの、今日の調査地のように、できてからある程度歳月を経た住宅地では、けっこう友だち関係も持続している点に興味深い。もっとも新しい団地や新興住宅地、アパートが多かったりして人の出入りの激しい地域では、また話は別であろうが。

したがって図14に示したように、いまの一番の仲よしと、いつまで仲よしでいられると思うか、の問いにも、「この先何か月かは」と短い見通ししか持っていない者はごくわずかで、むしろ「中学校になっても、おとなになってもずっと」という長つづきのする友情

を確信している者が多い。これも現代っ子を見直す一つのデータという気がする。したがって図15にも示したように、一番の仲よしへの信頼感をはかる尺度として、「もし秘密をうちあげたら、他の友人にしゃべってしまわずに黙っていてくれるでしょうか」とたずねてみると、9割以上が、「絶対・たぶん黙っていてくれるだろう」と答えている。おとなの目から見ると、淡くなった友人関係という気がするものの、子どもたち同士では、けっこう深い心のきずなを結び合っているつもりなのだろう。

図14・いつまで「特に仲よし」でいられそうか

	この先何か月かは	次の学年になっても	小学校を卒業するまではずっと	中学校に入ってもずっと	おとなになってもずっと
男子	13.5	18.7	34.9		26.8
女子	8.3	17.8	34.3		33.0

(%)

図15・もし秘密をうちあげたら

	絶対にしゃべってしまわないでくれる	たぶんだまっけてくれる	何かのはずみにだれかにしゃべってしまうだろう	ぜったいにすぐだれかにしゃべってしまうだろう
男子	48.1	40.8	8.4	2.7
女子	56.5	28.6	14.9	4.3

(%)

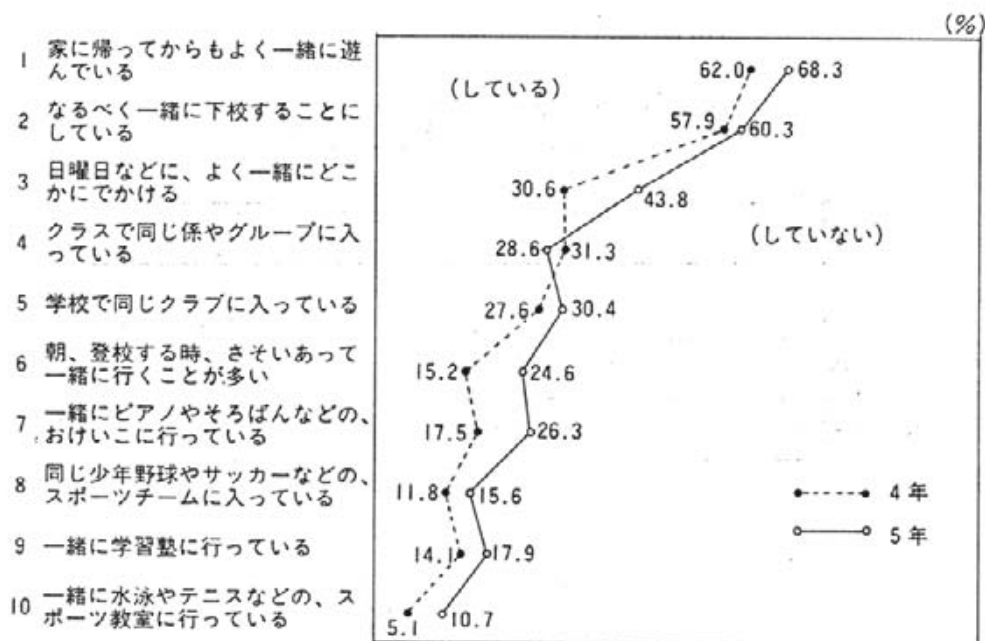
仲よしと何をしているか

では、こうした仲よしの友だちと、子どもたちはどう接触しているのだろうか。6年生はそろそろ忙しい時期に入るので、図16では、4年生と5年生の結果を比較してみた。つまり行動半径も広がり、一番仲間遊びの活発化する時期、「ギャング・エイジ」の子どもたちのようすである。

頻度の多いものから並べた図16を見ていると、上位の項目の「家に帰ってからも一緒に遊ぶ」「一緒に下校する」などは、そう心がけている子のほうが、そうでない子より多い。すなわち「帰宅後よく一緒に遊ぶ」「一緒に下校する」子が6割前後。仲よしでも特にそうしようとしていない子が4割。この4割を多いと見るか少ないと見るかは、議論の分かれるところだろう。

その次の「日曜などに一緒に出かける」になると、頻度はぐっとおちて3～4割となる。半分以上が、たとえ一番の仲よしでも日曜などに行動を共にすることはないと答えている。それ以外の項目になると、一緒にする割合はぐんと減る。とくに、現代の子どもたちは、遊ぶ時間が持たないので、塾やけいこごとなどに一緒に通うことで、接触の要求を満たしているのかとも思っていたのだが、図が示すように、仲よしと塾通いを一緒にすることは、むしろレアケースのようである。仲よしは遊びの友だち。勉強となると、自分のことだけを考えて行動するのだろう。それだけ、子どもにとって塾やけいこごとが、遊びの要素を欠いた、真剣なものになってきていることを示すのかもしれない。

図16・特に仲よしの友だちと何を一緒にしているか



仲よしとのつきあいの深さ

さてそうした仲よしとの「つきあいの深さ」について、もう少し追ってみよう。子どもたちが言うように、それほど放課後の行き来などがあれば、相手の家にも行き、家族のようすもよく知っていて、いわばきょうだい同然のつきあいをしている姿がなければならないだろう。

図17は、そうしたつきあいの深さを見るために、相手の家族をどのくらいよく知ってい

るか、家の中にまで上がって遊んだり勉強したりしたことがあるか、ケンカした時や病気の時に、友情が発揮された経験をもっているか、などに焦点をあてた質問である。

まず「その子の家」や「自分の家」に上がって遊んだり勉強したり、という経験だが、図が示すように、4～5割の子がそれを何度も体験しており、「1度もない」のは2割弱に過ぎない。したがって、その子の母親と話

図17・仲よしの友だちとのつきあいの深さ

		(%)			
		何回もある	2・3回ある	1回だけある	ぜんぜんない
1	その子のお母さんと あいさつをしたり話 をしたことがある	男子 48.8	25.2	9.5	16.5
	女子 50.4	28.7	8.6	12.3	
2	その子の家で遊んだり 勉強したりしたこ とがある	男子 45.5	27.0	8.7	18.8
	女子 54.3	24.9	9.1	11.7	
3	その子を自分の家につ れてきて遊んだり勉強 したりしたことがある	男子 45.3	23.0	10.4	21.3
	女子 49.3	24.2	10.0	16.5	
4	だれかとケンカした 時、味方になってく れたことがある	男子 32.2	31.2	8.8	27.8
	女子 48.3	30.5	10.3	10.9	
5	その子のお父さんと あいさつをしたり話 をしたことがある	男子 28.6	23.2	13.3	34.9
	女子 29.3	23.0	13.5	34.2	
6	病気になる時、お みまいに来てくれ たことがある	男子 3.3	9.6	9.6	77.5
		女子 8.8	10.2	12.9	68.1
7	その子と「こうかん 日記」をしている	男子 1.0	1.9	97.1	
		女子 21.5	23.8	54.7	

をした経験も、やはり5割くらいの子がもっている。この結果は図3「きのう遊んだ場所」の結果とも一致している。すなわち今の子どもたちは、室内遊びに慣れていて、お互いの家に入って遊ぶことがけっこう行われているようである。特に女子のほうにその傾向がある。室内ゲームをはじめとして、オモチャで遊ぶか、おしゃべりするかが、今の子どもたちの遊び方のスタイルだが、それには室内が適した遊び場なのだろう。

次は「友情の発揮」にかかわる経験だ。その仲よしが、ケンカの時味方してくれた経験を何度ももっている子は男子3割、女子5割。病気の時見舞ってもらった経験をもつ子は男子でほぼ2割、女子で3割。思ったより多いとは言えない数字である。

次に図18は、仲よしの何を知っているかだ。圧倒的に知られているのは、相手の塾やおけいこの種類。おそらくこれは、お互いに遊べる日の調整に必要なことからの知識なのだろう。しかし、それ以外の2つの項目に関しては、思ったほど相手を知らないようだ。特に男子にその傾向がある。もっとも、このうち「大きくなったら何になりたいか」は、今の年齢では友だち同士話し合う、というところまではいかないのかもしれない。巻末の集計

表を見ても、4年、5年とあまり変化はないが、6年になって少し大きな増加が見られる(25.9%、25.3%から31.4%へ)。しかし相手の好きなタレントについては、もう少し知っ
ていてもいいという気もする。

次に図19は、こうした仲よし同士の間で、おしゃべりする時の話題だ。男子、女子とも、学校のできごとが第1位。しかし2位以下はかなり性差がある。男子はテレビやスポーツの話。女子は友だちのうわさ話やお互いの悩みや秘密となっている。このような性差は、一貫して子どもたちの仲間づきあいに見られるようだ。すでに見てきたように、男子のほう
がより外で回数多く遊んでおり、仲よしの数も多い。女子は少数の友だちと、個人的なレベルにまで入り込んだつきあい方をしている。

つまり、男子が「遊び仲間」に近いおおまかで行動的なつきあいをしているとすれば、女子のほうが個人的親密さのカラーをもった、少し内面的なつきあいをしていると言ってもよさそうだ。それぞれの話題についても、内容によってその量にちがいはあるものの、全体としては、女子のほうがよくしゃべっているようである。

図18・仲よしの何を知っていますか

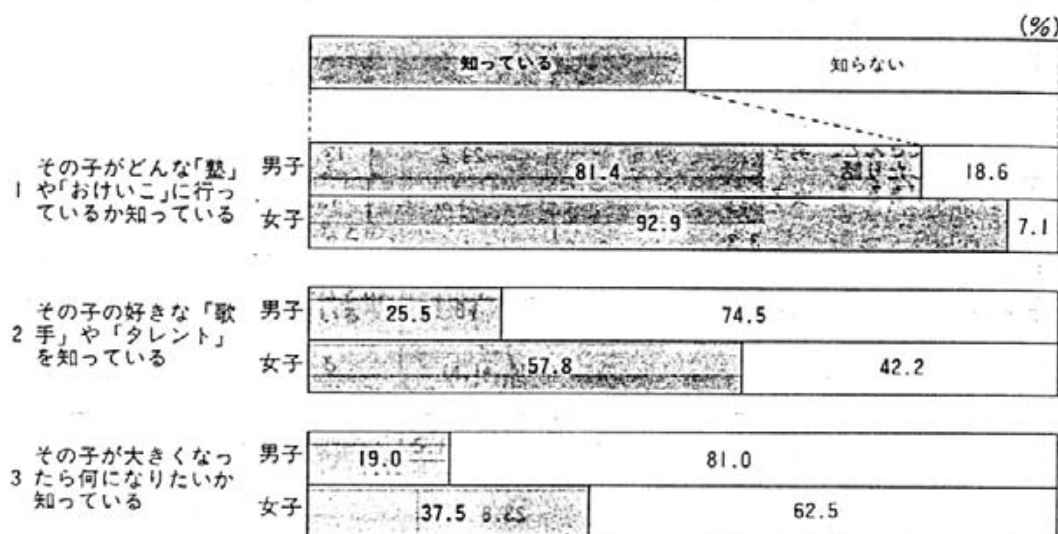


図19・仲よしと話す話題

		(%)			
		よく話す	わりと話す	あまり話さない	ぜんぜん話さない
〈男子〉					
1	学校でのいろいろな出来事	27.6	33.1	24.4	14.9
2	人気があるテレビ番組のこと	27.4	28.6	28.6	15.4
3	好きなスポーツのこと	25.9	28.1	25.4	20.6
4	クラスの友だちなどのうわさ話	23.6	28.6	29.5	18.3
5	最近読んだおもしろい本のこと	18.3	18.6	27.5	35.6
6	勉強のことやテストのこと	14.2	22.1	37.7	26.0
7	おたがいの悩みや秘密のこと	11.9	10.6	32.4	45.1
8	好きなタレントや歌手のこと	9.5	7.5	28.4	54.6
9	お父さんやお母さんのこと	6.3	12.9	37.0	43.8
〈女子〉					
1	学校でのいろいろな出来事	49.4	29.8	16.5	4.3
2	クラスの友だちなどのうわさ話	40.5	28.3	22.8	8.4
3	おたがいの悩みや秘密のこと	32.7	29.8	20.9	16.6
4	好きなタレントや歌手のこと	21.3	23.0	39.0	16.7
5	勉強のことやテストのこと	19.2	32.8	34.9	13.1
6	人気があるテレビ番組のこと	18.4	32.6	40.1	8.9
7	最近読んだおもしろい本のこと	14.0	18.7	42.5	24.8
8	好きなスポーツのこと	12.0	21.3	44.0	22.7
9	お父さんやお母さんのこと	9.3	22.9	48.1	19.7